



扶桑皇統記圖會

前編
五

遠13
2472
5



門へ遠13
番 2472
巻 5



扶桑皇統記圖會前編卷之五上下目錄

上 横佩右大臣初瀬祈子 中將姫誕生立傳

右大臣東園の桃と愛花の宴の圖

豊成迎後妻 繼母奸計諷中將姫條

繼母毒計害却實子 再度奸計中將姫陷巧事

繼子と殺さんとて却て實子と毒殺するの圖

下 松井嘉兵太と國岳謀義 將監苦忠助中將姫

嘉兵大中将姫が讀經と聞て善心ふる圖

横佩大臣狩獵雲雀山 豊成於山中遇中將姫條

豊成公雲雀山小狩と中將姫小遭る圖

中將姫於當麻寺得道 感得蓮曼茶羅條

継母の怨心天毒蛇とる姫化度ふより成佛するの圖

目錄終

扶桑皇統記圖會前編卷之五

浪華 好華堂野亭参考

横佩大臣初瀬祈子

中將姫誕生る條



室龜六年十月吉備大臣薨去ありける壽八十二才なり。前々小中鏡とて此公倭

國の名臣とて文学武学及び諸藝に通じ。唐土の軍術技藝の今の世まで日

域小傳に多き此大臣の傳授小據所なり。これを上一人より下万人の遺惜

まこととる者なり。同年中將禪尼と呼ばし奇特の尼公和別當麻寺小於て

遷化ありける。抑此中將尼とて八前小統一惠美押勝の舎兄従一位右大臣藤

原豊成卿の息女なり。又豊成卿大織冠鎌足公の孫正一位武智十名小嫡男小

舎弟押勝が貧乏引之篤実温和の君子なり。和漢の書典小通じ。管絃

の道も堪能ふ。聖武孝謙祿德三帝小事。公の政を佐け。君小忠誠と

尽つされん。君きみの御おん覺かく牙が出で度た緒お人ひとの尊そん敬けい重ちゆうく。家いへ自の然づか富と貴き采さいられ。横よこ
 佩いの庄さう考かうを領りやうせり。以もつ緒お人ひと横よこ佩いの大だい臣しん殿だんと称せうり。緒お代だいの雜ざつ掌しやう小せう國こく
 岡おか狩しやう監かん時じ常じやうと。者もの其その子こ源げん吾ご正せい庸ゆう二に舅きゆう藤とう六ろく有ゆう忠ちゆうと。父ふ子し三さん人にん豐ほう成じやう卿けい小せう仕し
 私しわく忠ちゆう直ちゆうと。旨しむく。豊ほう成じやう卿けいの北きたの方かたハ。此こゝ系けい典てん侍しと。元もと大だい内ないの女によ官くわんわ。り。り。り。
 天てんのな。色いろも。美み人にんふ。揚よう柳りゆうの姿すがた嬋せん娟けん小せう桃とう李りの顔かほ婉わん轉てんか。れ。も。君きみ輝きの御おん竈くわん
 遇あひも他たふ異いふ。れ。並ならふ。豊ほう成じやう卿けいい。ま。壯さう年ねんの頃ころ此こゝ典てん侍しを。一ひと度た垣かき間ま見みて。心こゝろ小せう深しん
 く。慕あこれ。れ。も。君きみの御おん覺かくめ。で。れ。女によ房ぼうわ。れ。何なにと。言いふ。る。辱はぢれ。や。う。も。な。く。高たか根ね
 乃な花はなと。余よ所しよふ。の。見みわ。れ。る。小せう神しん龜きの末すえ天てん平へいの初はつ乃の頃ころ聖せい武ぶ天てん皇かう御おん不ふ例れい
 小せう玉ぎよく躰たい易いう。る。也や。毎まい夜や正せい滿まんと。さ。る。頃ころ御おん惱なう頻ひんか。れ。大だい后こう皇かう后こうを。首くびと。り。
 緒お大だい臣しん甚しん愁しゆうひ。典てん某めいの官くわん人にん小せう妻さいれ。和わ漢かんの良りやう方かたと。考かうり。も。種しゆく。の御おん某めいと。進しんめ
 ち。ま。む。る。と。く。も。更さらふ。其その強きやうも。な。く。緒お寺じの僧そう綱かう緒お社しゃの神かみ官くわん小せう命めいて。加か持ぢ

竹き精しやう小せう丹たん絨じやうを。抽ひ出だせ。れ。も。是これ以もつ其その功こうを。猶なほも。夜よ毎ごとの御おん惱なう止とむ。か。れ。を。陰いん
 陽やうの博はく士しふ。占うらひ。し。る。小せう懂たうん。が。奏そう々ささる。是これ朝あさ家け小せう死し心しんある。者ものの死し靈りやうの。打うち。業ごう
 たる。早はやく。襖あはひ。鎮ちんめ。い。む。御おん惱なう愈い御おん大だい事じ小せう及およひ。御おん惱なうと。中なかつり。大だい后こう及および。衆しゆ人にん
 大だい心しんを。因より。行ぎやう基き良りやう弁べんあ。の。名な僧そうを。内うち裡り召めいれ。種しゆく。の妙めう経けいを。續つづ續つづせ。れ。
 又またく。も。緒お小せう直ちゆう宿しゆく喜きれ。り。然しかも。豊ほう成じやう卿けいハ。君きみの御おん惱なうを。殊ことごと更さら患わづらひ。直ちゆう宿しゆく
 の夜よ毎ごと小せう衣い冠くわん正せいく。弓きう矢やを。携たづね。て。嚴げん然ぜんと。守まもり。心こゝろ中なかつ小せう八はち百ひやく萬まん神しん小せう祈き言げん。帝てい乃の
 御おん平へい愈いを。祈いのれ。る。小せう或ある夜よ直ちゆう宿しゆく小せうあ。り。て。例れいの。ご。宵よひより。相あひ結むす守まもれ。る。小せう正せい滿まん
 過する。頃ころ雨あめ一ひと陣じん降ふり。出で。空そら中なかつ小せう怪あやし。れ。者ものの。声こゑ。中なかつ小せう豊ほう成じやう卿けい須す波は化け粧じやう乃の者もの
 小せう正せい滿まんと。弓きう矢や取とり。外ほかの方かたハ。出で。絃げん鳴なり。て。鼻はな目めの法はふと。行いひ。空そらと。望のぞみ。て。三さん度た空そら前まへと
 射いられ。ん。也や。者ものの。叫こゑ。声こゑ。凄せつれ。と。は。え。て。其その後あとハ。音ねも。せ。じ。何なに者ものも。其その正せい躰たいハ。見みえ
 かん。も。其その夜よより。君きみの御おん惱なう稍あ高たかき。め。い。日ひと。追おて。御おん平へい愈い在あり。た。大だい后こう皇かう后こうと

先づ百官百司女婦命婦おのりするまじ。千秋万歳と寿たまり始むるはかり
 々。是よりかぎる豊成の盛目の功なりとて。君の感感斜あま。豊成昨年来
 と七ひる由かれむと。きるむら奇縁や。彼紫の典侍を室家不給り。猶敷の
 御唐衣賞とぞ下され。豊成卿の思もくは。年来想憧れ。其人を給り。大
 の小悦び厚く帝恩と謝し。館將て帰り婚姻の儀或美く。執行ひ。これ
 より比翼の契濃や。連理の情浅く。夫婦の中にも睦まじり。本太皇
 辞。天地者萬物之逆旅。光陰者百代之過客。賦せ。如。実も日月の園守
 かなれ。何時より十五年の春秋暮て。豊成卿早五才成。ま。い。御子入
 もかり。え。夫婦とも只此更と歎れ。相結て。や。昔より神明佛陀小初
 子と殺る例鮮く。予も佛菩薩小祈誓して。子と授らむと。初頼寺
 乃觀世音ハ殊更御利益物也。た。國岡源吾も。侍女奴僕より連

豊成卿御夫婦初頼寺。奈緒あり。七日の間。奈。大婦とも。並門。邑。瓊。瓊
 あり。信心と凝りて。南無大慈大悲觀自在菩薩。萬望。子と授け。小。祈念せ。し
 且。信力の通。む。七日満。曉の夢。小。觀音菩薩夫婦の枕頭。未
 降。ひ。告て。宣く。你们夫妻丹絨を抽で。子と得人。更を祈る。其願。王。默止が
 々。我。省。命。天眼通を以て。普く三世觀通。と。小。你们。子と。なる。名。名
 因の者。更。小。也。も。細。祈の。切。か。も。小。任。せ。強。く。子と。授。く。を。と。脚。手。小。の。せ
 の。と。この。白蓮花。一莖。を。と。の。と。え。夢。覚。く。夫婦とも。睡。を。な。互。小。夢
 物語。ある。小。日。夢。想。かり。多。れ。奇。異。の。思。ひ。を。や。歡。喜。ある。更。限。り。な。佛。思。と
 尊。と。撞。く。の。施。物。と。捧。げ。救。世。觀。音。菩。薩。と。恭。敬。礼。拜。して。下。向。り。從。者。を。將。て
 歸。館。あり。する。小。笑。も。觀。音。薩。垂。の。御。利。益。空。干。く。と。紫。の。前。程。か。妊。娠。あり
 々。小。と。豊。成。卿。の。喜。悦。い。ら。を。更。かり。館。の。男。女。勇。と。立。門。の。人。と。り。も。慶。賀。の。音

と御父母首の座の男女是ハ珍一何を書ゆのふぞと云ふ

と云せ寺救世の誓言とありてををわの法の國の迎ん

と一首の歌を書つねむなり。豊成卿も北の方も其の筆も大い驚

嘆。是ハいふいふ難波津浅香山をの手習玉なる歌と云々録して書

のハ女人成佛の義をつねむハ九人にてハ在さ。いふる佛菩薩の御再誕

たるをうと皆奇異の思をどけたる。彼大聖世尊ハ四月八日小藍毘尼園

無憂樹の下にて降誕。のハ時生まざらふと七足歩。天上天下唯我獨

尊三界皆苦何可樂者と唱ひ。又吾朝の聖德太子ハ御年二十才小二月

十五日の平且東小向ひて堂と合せ南无佛と唱ひ初言。のハいと云此姫君の

こづこ才小でける奇特の哥と詠し書ゆ。更笑ふ不思議の中の不思議とヤ

かして。御両親もけり皆感涙と流しける。是より豊成卿御夫婦いよく

重愛をす。行時も側を放さず慈育られける。然る小豊成卿今やハ大納

言小て在る。天平二十年己丑右大臣小任せられ。此時姫ハ三才小なり。り

同年七月聖武天皇御位を皇女高野姫。孝謙。御譲せらる。即ち改元あり

天平勝宝元年とす。豊成卿ハ官位旧のく家の無兼昌信盛んぬ。萬の

望も叶る。更あはる。猶此上も姫の成長と侍女御后妃の備る者あはる。其

こそ老の本望あれと。姫の成人あると引も伸さる。思ひ春ハ花園小席と開

た。蒼の色香小就て姫と電。秋ハ月の樓小宴と致。絲竹小寄。姫と愛せ

られける。斯く年月立て。姫五才小なる。二年の三月。旬別荘の桃花今と

感かる。邸守より報し。豊成卿北堂姫と伴。家門の親人々

も羨引。別荘に。花下小席と設け酒宴と促。盃と申されける。実や

春風小咲る。桃の花紅白色と争ひ。八重も一重も咲満て。散も始ぬ。其中小



右大臣殿
東園の桃
と愛しとの
花盛の宴
成しきよし



五

芽張柳の糸長く。桃花小交りて風小靡靡くる風情さかぐ錦と織るかぐ。彼
白樂天の花下忘帰因美景樽前勧醉是春風と賦しえも余所ま
ど。不飽あまふ心も浮ままも客も待を賦し歌を詠し或糸竹と彈吹今
様朗詠して終日の真宴小皆醉と尽まらる。中より或人豊成卿と賀しちや
されたる。今日此桃苍林小酒宴を催しり。一更脚夫婦及び姫君のいづれ吉相
かり。彼唐土東晋の代小武陵の漁夫桃源小今五百歳の長寿を保ち。又東
方朔小西王母の園の桃を三ツ食して九千歳を歴らると云。貴卿北堂姫君も右
の仙客小あまふ長寿と保ちのふ事と祝しやされん。豊成卿も喜悅限り
かく。其日も暮るれ。銀燭數多點し。至終夜遊真を催されり。小北堂葉
の前夜陰の風小や犯されり。いん何となく悪風し心地惘し思えん。豊成
卿發れ酒宴と収めて鐘へ歸れ。頓小医官と迎て北堂の客跡を空鏡かせ

湯と勧めさせらる。小始小只感冒の脚悩かりと心易げ小や々々。小追々漸く小
重くなり。果小飲食も小廢り。身体憔悴し。いづれ妻へて日々を小豊成公
いづれ更かり。脚内人小門中も大い心で痛め。普く天下の名医を招れて良方と配
劑させ。緒寺緒社の僧綱社司小命ど加持祈禱させられん。定めたる天數
小や何れも效を奏せむ。時は是水無月半小かり。例年より暑熱酷く。北堂
も只弱り小弱り。今頼り少くと云ふ事。豊成卿ハ大い小心で悩まされ。昼夜も
病床小居て看病あり。神佛小祈誓し。萬望今一度本復させり。と祈り願ふ。
多れも病者ハ漸く小衰へ増り。今ハ斯よと思れ。多る小や。重たむと揚り。豊成卿
小折向の妾今ハ命生都り。小覺へん。多る。小則添まらる。せり。此年月の脚
情深く。鴛鴦の食の裡小比翼を契り。珊瑚の柁の上小偕老を約し。侍り。其甲
斐ち。己小現世の縁。尽て永た別をなす。も。君百年の後ハ九品淨土小於て

一蓮の契をありまらんとやされども豊成卿落涙ありて是を曉。絨小
 會者定離憂世の常。大聖世尊も梅檀の煙を免まむと。独来独
 性の生死の道維り相伴を得ん末の露本乃雪下。や後ま前つとも
 終の門道不往人の。是今始ぬ更なり。脚身先達て九品上生の玉の臺
 へ到り。半座を分て待り我ハ皆一現世残り。脚身の後生善所へ祈り。願く
 老命終む一蓮小生と純。未末永九契を為と仰せらるる。此の前の喜
 しげある面色あり。其脚詞を妻が為万部の脚経も勝り。善知識乃脚
 教化より尊くをなるぞ。但心引くハ姫の更なり。妻とらん後しては女小
 くり姫と憐と慈と生まるとむね。豊成卿點首心安れ予も姫の又多
 ら争う疎略たるをたど。脚身不代り且心を以て育つ。臨終の心と遺を六罪
 深た更とる。只後の更を念とせと一心の佛の名号と唱へ其脚引接を得る

兼浄土往生のいと勸られども。北堂あるがら姫と枕近く招允寄て其背を
 撫さす。你知くとも母が末期の詞をよ。よのよの現世と去る。長者く生ま萬
 又上の脚示不逆ひも更おれ女果和お慈悲の心を專と。召使者と恤む仮も
 一死心外持のいと。又君もいざ。年老のいと。やあを。時移り日三六後乃
 妻我呼迎へらるん其時ハ後の母公と実の親と母の心を尽し孝行を台り
 か。微妙と遺言。余波をの五丈夫や。憧愛の姫やとて。彼方へんは。此方を顧
 見姉女侍女維くわも暇と。南無觀世音南無阿弥陀如来と數遍唱へん
 姫も涙おれか。幼た掌と合。佛名と唱。豊成卿も称名あり。北堂臨終正
 念し睡がごとく命終あり。姫を先と有。合男女を放てど。注悲とける
 豊成卿も今更悲歎の涙小膝を沿。あが。泣叫人を制。亡骸と収め僧と清
 いて種々の妙経を讀誦させ。葬式の言と嚴重小執行ひ。遂小東位一片の煙と

せんらんと哀れかりたる豊成御多幸列睦一最愛の妻ふれぬ飽ね別を恋
し。終夜経綸を續編し。夜も明ぬれを流石小煙の迹もかりく思れ墓所
不到るらん。小氣疎た野辺の草の露も涙を誘ふ媒とかり哀とかり其公
名の残りて影も苗も。子物交物心と悼す。やまふれを涙かき二首と録して
夜とととに思ひあうて今朝を煙とかりて消果ふり

豊成迎後妻

継母奸針流中將姫條

隙行駒須臾も住せど光陰の移る更流水よりも早。横佩大臣の息女もや
七才ふあられなき小孫生始の頃。姪女姫の心を慰めん。別荘の花盛され姫と誘
ひ侍女奴隷もど將て彼所へ。花下小纏を敷あ。魚行厨を罷。酒宴を
わして遊び樂とたる。子心ち下郎の小兒入走り来。櫻の枝を手折んとく。小

其母と覺る者地来りて小兒と荒く引戻。殿様の姫君の御花見ある。花と折
んとする妻やあると叱懲。免を奪と土頭と付て一向小兒を曳連て。帰
りたる。姫はくぐと。彼は何人か。何由子。汝叱り連。く。ど。向。女答て。中
々。只今の者。此御別荘の番人の子。わ。下。の子心。小姫君の御前。も。悼。ら。ど。化
と折んと。ち。い。ひ。其母。ち。る。者。後。の。御。咎。と。心。ま。子。と。叱。懲。一。御。謝。を。中。上。て。子
と連。う。り。い。かり。と。言。上。れ。ぬ。姫。也。て。あ。ま。れ。下。く。の。子。ま。も。猶。母。あ。る。小。吾。身。ハ。幼。た
時。母。公。逝。去。の。ひ。て。より。母。君。な。り。母。公。の。薨。れ。の。際。お。父。上。後。の。妻。と。迎。む。り。実。の。親
と。敬。ひ。孝。行。お。せ。よ。と。仰。有。れ。も。い。ま。ど。又。上。後。の。母。公。と。迎。む。り。ぬ。何。由。と。問。ふ。小
姫。女。も。姫。の。幼。稚。ふ。似。氣。な。く。紀。憶。よ。れ。を。感。じ。稍。返。答。あ。あ。と。答。ふ。漸。お。答。て
御。又。君。も。姫。君。を。継。一。れ。母。公。お。仕。さ。せ。る。と。後。の。御。臺。と。呼。迎。む。り。わ。て。侍。る
布。し。と。中。の。小。姫。ハ。首。と。手。振。不。く。吾。身。ハ。早。う。母。公。の。欲。れ。ふ。と。雨。と。泣。の。ふ。ぞ。女

女侍女們さむぐお練りまじり。花見もよれ程ゆて館へ歸りたる昔秋尊未
ご悉妻太子とや五才不成の頃御姨嬭曇彌夫人御妹摩耶夫人の忌日
お當りたる日サ菩提所へ太子と妹母お抱きて参詣あり堂内小入御吊ひ右
々る間太子傳人右將軍といふ者お伴れ無憂樹といふ木の下の遊てあり
けるお折しも無憂樹の花盛なりけれ。赤心太子子右將軍お向ひあの花折と
て得させよとのまふ。右將軍承りし心中お思ひ多。五年以前今今日監比
屋園お。摩耶夫人此無憂樹の花を手折らんとして。太子右の服より御誕生
あり。程なく夫人を喪死去のあり。はるふ今若君其義を知らむと。御母公の紀念
花を心なく折取よと宜推さよと。不覺懐旧の涙を流し。これを太子其心を
むむ。何ゆ。花を折て得させぬやと責り。右將軍堪々の。彼花八君の實の御母の
紀念の花ありし者と幼く在せむとて折取よと仰る御心をさよと練るおど

太子お替めのみ。諸は九お誠の母公在る。これ如何なせのいと。向も右將軍
包む。斐能と。此六何と。隠し。命れ。今の母公。御姨嬭お。誠の御母在る。其ハ
如此く。お。摩耶夫人の逝去の始終を語り。お進せ。これを太子推し。御母
夫人の死去を悲し。お。是より。御殺心の念始て萌り。お。と。其。実母の死を悼
て。佛道と。幾。今。の。横佩の。姫。姫母と。て。菩提の。道。入。る。種。と。わ。り。と。ハ
後。お。思。ひ。知。さ。る。斯。く。姫。母。公。の。わ。れ。を。悲。し。ひ。豊。成。御。向。ひ。吾。身。と。幼。た。内
お。母。公。お。後。ま。す。お。せ。御。身。を。も。定。る。お。見。覺。を。お。願。り。お。又。上。吾。身。の
お。母。公。と。再。び。迎。へ。お。れ。お。も。お。美。の。母。公。と。思。ひ。仕。わ。る。お。せ。お。と。長。者
く。お。れ。お。れ。お。父。の。大。臣。お。れ。妻。と。い。ふ。お。と。感。り。お。れ。程。お。各。へ。お。其
お。わ。て。後。妻。と。迎。へ。お。被。為。さ。る。お。姫。母。お。つ。け。風。お。つ。け。お。母。公。と。迎。て。お。と。度。く
お。望。ま。れ。お。大。臣。も。官。愛。の。姫。お。れ。お。其。望。と。叶。ん。と。心。お。好。ま。れ。お。是。彼

と其後妻おとめ人をも求われども橘緒房卿の息女照日前とけるハ幸
 二十と過ぬまじど其又母婚と擇ていす何友も嫁れども此照日前ハ雙たれ
 美人あり其面負ふ紫の前小租似たり是亦依豊成卿緒房卿不婚姻の義と
 成卿後の北堂中下されども予知命の幸小及び你と申迎ふる妻強ち色と好ハ
 あまご子一人の女ありて後の母と望む更切かる也此度你と迎へたりこれ雅た
 者を所生の子と思ひ不使と加てもと有れを照日前まで緘小姫の御妻ハ面貌
 美く知さくちと兼てよ及び侍る願ても得た幸な侍りまき実の
 子と思ひ鍾愛する命を辱し争う隔心のいれれと吞られども豊成卿も心女堵
 て深く怡たれども是より照日前ハ姫と愛慕する昼夜起居心を用ひて傳
 へ言れどもおと姫は嬉し実母とすの列睦びる斤時も側を去す繪る

き蒼結はの待貝合めんの遊戯も継母公と俱たり子心も敬ひ傳九仕へ
 のいなり。継母も姫の親と睦まひつけて最愛とまき。師と精と琵琶はく
 琴も習ひたるも天性聰明令利の姫ある一度より更と再び忘る更お
 くの学お徒ひく追く上達し其教る師も敬馬嘆する更敷度不及なり。まも
 姫の爪音清雅おて声すも美く。伽凌頻迦の嘯る如くあれを中者感せざるハな
 継母照日の前も及ぶざる所をたれ心小恐を愧入またり。姫ハ絲竹の技堪能
 なるのまを。手跡勝と和歌とまよと詠せられども又大臣ハ再難得者
 と愛憐いしく勝りたる。斯て姫九もなりたる年の三月三日當今孝謙天皇と
 女帝おて在りた。殊更皇位の道と好ませの今日桃花の節會行せの
 かつた三公九卿の簾中息女達の中ハ絲竹の道不堪能のハ擇まれ大内小召れ
 宴會を催し右大臣豊成卿の北堂照日前ハ絲竹の技小長せしもの

あり。又其息女も幼少あらず、絲竹の技も妙なるよし。よて天聽小達一、然即ち宜
 首下て母子も官中へ入る。豊成卿大に喜悅あり。家の美目たりとて北堂
 姫も十分不衣紋の綺羅と飾らせ、爛熳く、刷りと糸内まきれ、其他御擇小
 預り、棋家大臣の北堂息女達、面々今日と曠と粧ひ飾りて、官中へ伺候あり。
 各勅詔、不從ひて、御簾間近しく並居られ、其光景錦綉文を、狂り羅綾色と
 争ひ沈水蘭奢の名香、是れ白成添、翠の髪、緋約とて、長く垂、蟬始とる、腰
 束らふゝ、如く、履た、眸ハ珠玉を耀う。絳、たる唇ハ珂雪と、含と織たる眉と
 揚柳の垂と、欺た、嬌たる顔ハ芙蓉の花を、辱む。持は、是れ芳野初瀬、乃きと
 蒼一時、小咲高雄と、田の紅葉、同日、深、か如、程なく、天皇玉座、小出御在、皆一
 同、小御對顔あり。上巳の御祝儀とて、桃花酒の御土器と、賜うられ、並居る女
 房、達、雞有、天盃と、頂戴あり。御壽、千代、万代と、祝し、せられ、天皇龍顏、麗

く、鈴、絲竹を吹、彈、をた、し、詔下り、る、小、内侍司、藏司、奉、う、る、を、指、揮、し、
 宋女、女孀の、女房、手、毎、小、樂器、を、捧、出、琴、瑟、琵琶、箏、の、琴、大、鼓、羯、鼓、篳、篥、
 篳、篥、笛、等、と、席、上、小、並、立、を、内、侍、司、其、役、と、と、分、る。中、也、照、日、前、和、琴、
 姫、の、箏、の、役、小、當、り。其、他、の、女、儀、達、も、指、揮、の、樂器、を、執、各、衣、紋、を、刷、ひ、
 絲、竹、と、吹、彈、奏、る。素、り、揮、出、せ、れ、堪、能、の、人、々、を、面、々、妙、手、と、々、今、日、を
 一期、の、曠、業、と、綱、奏、る。小、宮、中、也、管、弦、と、も、或、合、或、離、を、恣、に、奏、る。如、く、心
 細、も、及、ぶ、れ、ど、云、小、於、君、も、玉、冠、を、傾、け、て、睿、聽、在、り。殿、中、小、奏、列、と、る、と、も、乃
 官、方、内、親、王、月、卿、雲、客、女、孀、宋、女、ま、心、耳、と、澄、て、入、彼、西、方、淨、土、小、奏、し、る。歌
 舞、の、音、聲、の、音、聲、も、是、小、の、優、と、人、々、感、歎、あり、其、中、也、豊、成、卿、の、息、女
 也、づ、九、女、の、手、技、を、争、う。衆、小、勝、り、て、瓜、音、清、雅、か、と。程、拍、子、序、破、急、揃、ひ
 音、或、ハ、高、く、或、ハ、低、く。群、雀、の、中、小、鳴、の、啼、る、如、く。除、耳、も、天、と、朝、と、會、

も羽をとりて池に遊魚も鱗と休めて躍出ぬと覺る古執巴
 とひり琴の名人の瓜音の池中の魚鱗躍出厥小殺糸馬仰て秣を食と
 荀子勸学の篇小書も此姫の編の如きと君も御聽と狭くは許す
 斯く管法も果えん天皇衆女の技藝と御賞美在。殊更豊成が女の瓜音
 了れ妙す。今日の管法中の第一なりと夫も君の御手づく玉の算と正賜り
 々却て継母照日前に御褒美の御封も下らる心の中不深く耻らふつげ姫
 乃名譽と暗お始と始く継子と悪む初念慈小萌るも薄情なり。凡
 劣れ、優る、悪む、今小始るる婦女子の常も一時の遊藝の優劣、依
 てさしも睦るる。継母継子の中、忽ち仇敵の思ふ。妬害の毒心を生むる
 更素り前業の仕むる所なり。斯く君より女儀達へしく小御出物と
 給り皆御暇と下されも、各退出あり。照日の前も姫と伴ひ乗物も、

詔あり。小早先より姫の譽の更館へ安えられ。豊成御侍より姫と迎へ扇に
 多く奉言賞され。照日の前も、俱小賞あり。胸の痛猶熾と憎む心と
 増々。其年も暮て明も。姫よりおかれ。継母照日前へ去年の夏の
 丸人。妊娠しられ。今年天平勝密七年二月小平産あり。男も有る。其
 豊成御の喜悅斜か。予觀世音小祈誓とて子と得ん。女も家と嗣と
 人更如何と思ひ。今男子と殺し更此上の大慶なり。豊成と名と呼れ。寵愛
 ある更限か。姉姫も弟の出生あり。と二り嬉し。悦び且夕抱た。今愛しむ
 い。おる。小継母、大内の管法より心小姫を悪む。豊成御の心も。前より聊も
 隔あれ。休む。良人の陰めて。其と。難面更度。小及び。姫、実母
 の遺言。後の母公と実の親と思ひ。孝行を尽せ。と言せ。小推た耳。小
 言。賞。時の。間も。忘る。更。小。継母の。更。小。觸。て。小。難。面。と。小。恨。と。小。倍。故。小。仕。

其難面を仮し口外にむねも流石難心小冠母の貞色の折悪れをさるふ付
 ても実母の慕う。佛前入て実母の位牌を拜入。念れど泣き度なるぞ
 痛くうらみの。実や貴も賤も冠中の氣の許心苦れ物にあふとも
 他人と他人の寄合親子とたる。二世うぬ深れ因縁あれ冠子とちり
 憎むや。は更なり。是は且ちた姫斯亡母公と意真ふ付ても。せめて孝親
 のとあつ佛前お茶と供り香焼て其霊を祭りゆいさる。何卒經一卷の
 とも續習ひ母公の菩提を吊いさる。難心小冠を護り一時又の大臣小向
 ひ吾身と先亡の母公の御吊ひのよめ。御経を讀み思ひさるふ
 い御経を教する御僧と迎へむらう願えさるふと大臣感涙と流
 さても你のいと推れ小殊勝ある望を起せさるふ。されも續經を讀み
 世と知身と成てさるふ。難れ難れ者の為る業あふと此義の思

とさるふ。其志しと則ち母の孝心たれと亡母もさるふと嬉しく思ふと止
 りたれども。姫小押入。仰さる更もなれども母公の御位牌を拜り只御念佛を
 唱えさるふ物足ぬ心地いふ。何卒御経を教給る御僧と迎へ給ふと
 強て願ひのよめと大臣も其志の切らる感。道德直向れ老僧と招れ姫
 の願ひのよめも語り。姫望のよめ可然經一卷續習ひを給へ頼
 りされれども老僧感。さてもく世小奇特なる御更ら。漸く十乃乃姫君
 う難有の玉を起しより更誠お火中の蓮ともな。それ慈母報恩の御為と
 あふも。稱讚淨土經小如。抑稱讚淨土經とや。天の如も。寂迦牟左如
 来給独園小於。阿弥陀佛の名号及び極樂世界の功德莊嚴と讚む
 ひ罪業深れ男女さるも。阿弥陀佛の名号と信念せむ。極樂淨土へ往生
 するよと祝ふ妙経なり。故小稱讚淨土經と八早の入り。此御経を受持り

讀誦さると先亡の靈成佛得脱さる事疑ひつゝ其讀誦さる人も身
 の大乘經典を讀持つ功德と異なる事いふも大臣深く信仰ありて
 即ち姫を呼出し老僧を見下りたる事。姫は嬉しく老僧を敬礼ありて老
 僧も答礼。浄土經を問ひて句逗清濁の讀法と烟小指南さる事。老僧
 穎悟令利の姫に。一度度て頰の覺へ二度度て能讀誦しめよと老僧
 發誓して。是れ凡人おてに在る事と感。父の大臣も其由告る。大臣喜悅あ
 りて。僧の齋を設て。僧侍に。妻の布施をよて歸らる。斯て姫は。所
 の經文を習覚。日暮の願叶ひつゝ悦び。浅く。これより八母へ報恩のてめ
 毎日佛間にて。林讀誦。浄土經を六卷。讀誦し。一日も懈怠忘らる。如此幼
 稚ながら孝心深く。天性心柔順。召使男女小情深。萬幼稚小似氣か
 く長者さるるを。諸人賞譽さる。姫十五ふり。年の水無月故

母公のさし日當り。日姫其墓所。小結。京乃妻とも思ひ出。今この母乃
 難面ふつ。日実の母公の世。小存命。在まき。と。あつ。も悲しく。こ
 懐旧の涙。せれ。支。困。小脚。經。を讀誦。あり。て。後
 一。首の歌。を。詠。し。え。え。う。ら。む。館。へ。帰。り。の。ひ。る。諸人。此。歌。を。傳。せ
 感情。を。催。し。袖。を。沾。ま。ぬ。ま。う。う。継母。照。日。前。の。姫。の。年。と。重。る。事。從。ひ
 倍。姿。貌。ね。び。の。ひ。う。艶。しく。愈。々。智。の。増。え。る。事。姫。と。惡。味。の。内。小。カ。を
 如何。も。と。人。ま。れ。ど。七。八。や。と。且。夕。其。便。を。窺。ふ。も。姫。ハ。萬。の。奉。止。正。く
 父母。小。事。を。孝。心。深。く。一。点。の。過。失。も。あ。ら。ず。良。人。小。説。言。を。種。種
 も。た。く。皆。と。隔。て。足。を。搔。心。地。堪。ら。ぬ。て。我。親。里。より。附。人。山。下。遠。内。と。い
 武士。と。密。小。招。れ。聲。を。低。て。言。々。す。其。方。も。知。ら。ず。當。館。の。姫。と。妻。と。何

ある過去の悪縁のや分構みまき妾と忌嫌ひ時々又親へ悪く言ふ小娘言と
 中ふす。良人も実子の愛ふ溺る其約を信とて。稍妾と疑ひ忌疎介
 多色あつ。妾豊丸とつ子とて入殺けらる。今更離別せられてハ又母及
 家門の人々何の顔有てう面を合とて依て自害せよと思ふ。妾
 死す。後夫豊成卿へ姫の悪の愁げさふ世成去とて言とて。空泣の
 涙ともふ語りたれば遠内へ其偽言あはれ知とて大に驚き見是ハ短慮なる御
 更々姫君の讒言と厭ひの多とて。御自害及ぶと。小臣暗小娘と切害
 何者の所為とも不知。小針ひひ。必と短慮小御身とあ遇らゆいと
 と練々ふと。照日前満顔小咲を合とて。其約のてくあをまよと何と
 申入る。無慈悲ある更小あはれと。姫と人まれと失ひて。其思賞小
 ハ。女が兒豊大宮が世とあを。你的子小遠次と執権職小執三々々の領地

を予へ國司がよまふ。これをも你的手小て。姫と害せ。更露頭あまき
 身も連座の罪と道と。能く思慮と廻し。更と仕損むる更あはれ。是ハ
 當座の原義美とて。砂金一包よへれ。元来貪欲の遠内大い悦び。さ
 幼年の姫君刺殺人妻ハ氣と殺と。易く。面と金持。盜賊の体小
 誼。竊入切害。いふ。維り。小臣の所為と知い。あはれ。更もたげ。昔ひ。さ
 と。照日前深く。恰ひ。猶細くと。密吏と言合と。遠内領掌。暇を告て
 己が私房へ。帰リ。一子小遠次を。密に。招れ。照日前の頼の密吏と。語り。ま。せ。れ
 る。小遠次以外の外。小娘。是ハ。とも。又の。御心。ハ。天魔。破。由の。入。替。り。ゆ。我。ハ。子
 御。基。所の。附。合。と。當。館。へ。参。り。勤。仕。さ。る。上。六。姫。君。も。全。君。さ。り。御。心。切。害
 する。是。全。殺。の。大。罪。人。と。罪。三。族。及。び。ひ。を。より。や。緒。人。の。目。と。欺。れ。と
 身の。罪。名。と。懲。し。遂。る。も。天。罪。と。争。う。免。れ。る。も。あ。は。れ。終。つ。ハ。主。殺。の。悪。名

露頭ろけん。又またその母ははも愚男おろこも嚴科げんか小行せうかうのこゝろを。御臺所おんたいしよも罪つとを免ゆるれり。又また御臺おんたい忠郎ちゆうらうかあど却かへて大不忠おほふちゆうとわらふ。抑當おさむらふ館くわんの姫君ひめぎみ。御年おんねんいまだ幼稚ちゆういとせむ。尋常よつねの女子むすめと異ことなり。利發りはつ聰明めいめい成なりし。年としの長ながず。婦人ふじんも優やさし。御西親おんにしん。御孝心おんかうしん深く。萬よろづの行いさよひ。一ひと点てん乃すなは御過失あやまりも在あらざ。されば継母すけはは公こうと御おん又また不純ふじゆん言ことのよより行いさよ。又また御臺所おんたいしよの忌憚いまだりのこゝろ六む恐おそむ。継子すけこと憎にくむ。ひての妻つまもい。一ひと只ただ我度わがたも御練言おんれんごんのよよりと臣下せんとする者ものの道みちをい。御おんと結むすぶ。練れんを。又また却かへて眼め小角せうかく。至いたる賢けん。你あなたが利り口くち。左程さほどの妻つまと你あなた小教せうかうら。又また姫ひめも至君しきん乃すなは行いさよ端たん。かんと。元もと我われ八橋家はつはしけの臣おん。北堂きたうの附人つひてと。當館たうくわん。来きたり仕つかむ。真まことの至君しきん。北堂きたうなり。其その至君しきんの生害なまが。一ひとむと有ある。臣おんとて余所よとふ。る理り有ある。人ひとと主殺しゆころと。言ことを。又また女むすめ主しゆの妨たが。と。なる。姫ひめを。封ふう。と。有ある。我われ中ちゆう。暗あん。と。

見みこ。ひて。一ひと大妻おほつまと明あ。頼たのむ。の。一ひと也なり。推言おしごと。て。領掌れいざうせり。と。ぬ。大女おほな。夫おとこの言こと。駟馬しんばも追おひ。況いはん。至君しきん。昔むかしの言こと。と。又また露頭ろけんと。刑罪けいざい。行いさよ。つ。も。主人しゆじんの為ため。捨する。命いのち。露ろ。也なり。惜おぼし。と。你あなたも。某たが。子こ。なり。善ぜん。あり。有ある。愚おろ。小せう。も。あ。れ。親おやの言こと。煩わづ。と。子こ。も。道みち。あ。と。有あ。無な。の。又また。小依せうい。て。所ところ。存ぞん。あり。と。刀やいばの柄つか。小せう。と。掛か。否いな。と。言こと。を。手て。封ふう。と。な。れ。顔かほ。色いろ。な。れ。と。小遠せうえん。次つぎ。其その。練れん。と。を。察さつ。一ひと。解と。と。も。咲さ。ひ。先ま。の。如ごと。く。や。せ。八はち。又また。の。心こゝろ。を。引ひ。と。入い。と。な。り。左程さほど。も。意い。を。決け。り。と。上うへ。の。愚おろ。男おとこ。も。安やす。心こゝろ。と。せ。り。此こゝろ。上うへ。又また。と。日道ひみち。と。妻つま。と。仕つか。遂すなは。と。く。い。と。も。幼稚ちゆうちの姫ひめを。封ふう。人ひと。小依せうい。の。人ひと。と。却かへ。て。人ひと。も。見み。外ほか。り。妻つまの妨たが。と。かり。い。と。も。小依せうい。て。愚おろ。子こ。明夜めいや館くわんの結所むすぶところ。相結あひむす。直宿ちよく。を。体てい。小依せうい。て。か。り。又またの忍しの。小依せうい。を。身み。外ほか。て。支さ。む。る。者もの。あ。と。を。拒こ。と。封ふう。と。あ。い。と。も。其その。間ま。小依せうい。又またの姫ひめの居所いす。踏ふ。と。も。て。本意ほんい。と。遂すなは。と。く。能よ。く。面おもて。と。包つつ。と。姿すがた。と。終つひ。装ま。と。て。人ひとの。見み。知し。と。る。よ。も。小依せうい。

夕と滅や不言れむ。遠内始ひ其かてこそ我男なり穴賢人ふ悟れま
 ととて。空々小平笠とを示し合々。小遠次ハ又小別々私房へ入けり心
 中思惟多し我又慮り浅く御臺の切小膳れ罪ある姫君と害せん
 欲せしむれども。阿岡將監が妻ハ女がう男優りの女女小て姫君の側を去
 び守護せられた。容易ハ討たざるを。吾朝の阿部ハ丸ハ敵の矢面小きて
 仲哀天皇の御命小代り。漢土の記信ハ高祖の身小代り。項羽が為小焼
 殺され俱小忠義の美名と書史小遺せり。我も一命と捨て姫君の危急を
 救ひ且と父の心を善小飯せり人と思慮と定め密小所存の程と通の遺
 書小書紀ハ。翌日阿岡將監の宅。行子息源吾小對面。近頃率示たる
 中妻がう愚子一昨夜も昨夜も。姫君人の為小切害せられんと。兩夜とも
 一夢を見い。心中心穩うかへも。さう小依て惡夢の虛実と試ん。今宵

と姫君の御殿の庭の辺。直宿と勤番仕り。御辺ハ次房小直宿ありて出
 口。成能固也。時々見廻り用心台り。ふとと中々。源吾日未忠直
 なる小遠次がう。妻あれを。先以て姫君を大切小思はる。心々満足
 せり。連夜不吉の夢を。怪れ義たり。夢。虚妄の物。実夢を
 小在り守護せられ。小遠次重て。思。子細の。今宵我。御庭
 忍んで直宿も。妻と。御賢。内外の人。知。固。別
 告て我宅。其日の薄暮。出仕。阿岡源吾。黄昏
 頃より出勤して。姫の居間の次房小直宿。障子。兩戸を鎖固也。出入者。未
 改め。少心。油断。時々見廻り。心と賦て守護。小遠次。頭巾。深小被て
 面体。隠。衣服。平日。異。小。姫の御殿の庭。小偶。身と忍び

又遠内の雲翳ひ入をを規ひたる。斯く夜漸々小更遠寺の鐘四更を報ひぬ。密雲天小満て月刺もまの暗夜小山下遠内ハ忍姿小覆面。時分ハ一と館の堀際から見越の松樹傳ひて高堀と乗越庭へありて姫の宿所へ潜足して忍び寄と疾より窺ひ居る小遠次声をもけと後より無闇と組付より遠内ハ我子と敷かふもあを愕然として諸ハ監平の見処ハ心得振をたす太刀抜放し。只一討と斬込を小遠次も太刀と抜合して受留おから父の身小過ち有せと太刀の棟わ切結ひ只切と帰せんと働けども強勢の遠内勇と奮ひ踏込と斬まらふと小遠次ハ敷所の重手と肩眼暈てけける所を遠内得たりと乗るを終不止と刺る。此時館の内ハ源吾直宿と居る。ぐるが外面ハ太刀ち合す音の申ゆる後追取刀と大声。維在庭中ハ衣盗入と覚ると出合て搦捕と叫ぶ。遠侍ハ在合武士とも此声ハ

月と覚。弓よ太刀よ拒火よと牛舛い。遠内ハ源吾ハ呼り声を更。諸ハ今宵便宜あり。愚息ハ何々何々見せられて四面倒かり。重て本意と違ふ。遠足ハ高堀おれより。身を躍て外私下我家と臨て逃帰る。源吾ハ六人ハ武士ハ拒火を振まきせ。近出てこれハ早曲者ハ逸失て影も見え。隈を捜し小廣庭の隅小侍者あり。依て拒火を振て其面を隠れ。頭巾深く被れ異なり。小次女と終装ども持く山下小遠次あり。敷所の手と肩己ハ呼吸断る。源吾大ハ後れ諸ハ小遠次曲者ハ闘ひて討まると覚。早く出でて如勢せむ。斯あなく討まを。時後れを残念あれ今朝小遠次我宅へ来り。姫君害小遭り。り悪夢を人其虚実を弑人。庭中にて直宿せんと言つ。悪夢ハ其身亡と凶兆かり。但一曲者當館ハ竊入ハ何の爲も察難し。姫君を害し。不審更小暗や。其ハ且む。わね君乃

御為ふるも命を奪はれ者ぞ討せし。更の惜さきと悔と急死山下。遠内が方へ告知せし。と
 下部をまきせし。遠内へ我家へ帰り息吐ぐ。在る所へ源五郎をよむ。急使
 まり来り。御子息小遠次殿館の廣庭にて何者の所為ともあはれと討せし。り
 早く来りて死骸と檢りし。討せし。告る。遠内大に仰天し。心中思ふ。先
 先刑監率なりと思ひ討て捨し。愚息も有る事と俄に心強たり。取物も
 取あま使とも小館ま行拒火の影も照し。心強もかた子小遠次も
 るるゆいよく。強死。腹中も諸も不便なる業と去て。千悔されも其甲
 斐か。我手小掛しと言ん。ちり。あわぬ体にて源五郎向ひ愚息。今宵脚
 館の結所にて直宿侍んと申出勤し。いかに何れ此所にて討せし。いかに何れ殿の
 脚威光を以て。當の敵と穿鑿なり。下されし。源五郎の頼入り。かると。怒波と
 おま。我子の亡骸と轎小乗下部へ昇せ。我宅へ帰リ。遠内が妻へ我子乃

死骸と目するより大に強死。夢ごとく悲して。空に死屍ふ。とて。書を放
 愁傷さる。斐限なり。遠内へ妻も我切書せし。言ん。ちり。強欲不仁の邪
 念も消失。心中後悔とせし。斯く有果。死あはれ。聖日。野
 辺送とて。一片の煙とかり。僧と請じ。我子の後世佛果と吊る。我子の遺物もあつ
 り。小遠次の手函を用ひ。る。小通の遺書あり。急死。操披れ。又
 又練も。承引。かた。死と以て。又を練り。善道小飯せし。又。詳と。決ま
 変て。又の手。死と。由の文意と。微細と。書紀。遠内。胸を。嗔。後悔。我
 脚墓の。患。除。子孫の。後。栄。と。計。え。と。二。園。送。り。却。て。我。子。と。切。害。せ。り。実。や
 天。向。て。淫。を。吐。と。天。を。汚。と。更。能。と。却。て。我。身。と。汚。と。古。語。も。今。我。身。も
 思。當。し。是。一。應。実。不。也。安。し。も。罪。多。死。姫。君。と。害。せ。んと。せ。過。り。と。此。愁。と
 釀。し。肉。身。の。我。息。と。手。ふ。け。何。と。頼。小。世。と。送。る。を。今。ハ。仕。を。辞。し。出。家。入

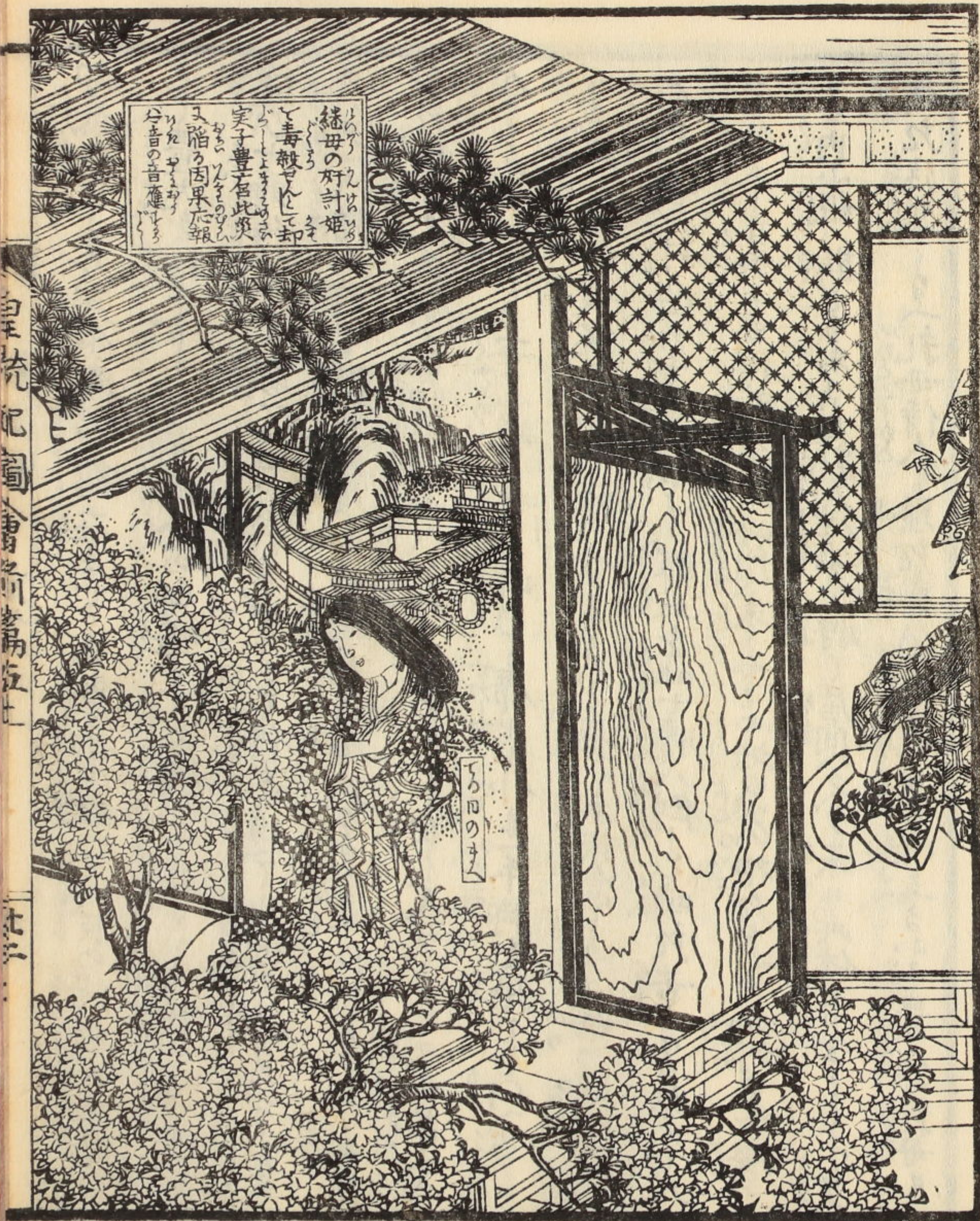
道と緒の霊場と願拜し。我子の佛果を祈ん。妻小其意と結くれ。妻も
 日ごと世厭う。思ひよ小尼法師とあらま。望とるふより。遠内是を
 由る。北堂照日前小願ひ今般愚息が不慮の横死より。老病發して勤
 仕か。く。何平脚暇を給う。と。乞ふ。其願小仕せられ。も。遠
 内恰夫婦も。髻と。或僧と戒師小頼。遂小出家得道。所有緒
 圃の霊場。靈佛と願拜して。我子の後生善所と祈り。夫妻も殊勝の道
 心者と成ふ。多。嘸忠なる。小遠次孝なる。小遠次其命と地て。姐を
 救ひ。又を善お飯せ。む賞。とも尚餘ある。若者く。く。

継母毒計害却実子

再度奸計中侍姫陷巧吏

横佩の後妻照日前山下遠内小命と。姐と喜せん。巧なる。小遠次が横
 死。因る。遠内仕を致して。出家。され。兼ての心巧と画餅とな。此六如何

く。姐と亡ふ。な。尚も奸針を心中。回。く。其年暮。明れ。姐八十
 二才の春。迎。豊九。三才。ふ。れ。多。照日前。日夜。姐と。縛。ん。思。悪念止
 時。た。百般。工夫。を。せ。中。小弥生。の。郎。句。あ。も。なり。多。継母。忽ち。針を
 案。出。暗。毒。薬。と。取。寄。草。の。餅。を。制。衣。て。其。小。包。と。交。姫。の。居。間。携。へ。往
 飾。と。雛。棚。を。あ。が。て。借。も。美。麗。く。雛。を。飾。り。ひ。ひ。ま。ま。女。草。の。餅。と。綱。
 々。殊。更。心。を。竭。て。製。衣。せ。れ。侍。女。們。小。と。せ。ど。雛。小。供。後。小。脚。身。入。樂。と
 り。と。て。菓子。甚。小。盛。て。よ。多。小。姐。大。小。恰。小。押。戴。た。く。と。う。あ。む。と。雛。棚。
 供。か。れ。も。ひ。も。継。母。仕。と。あ。ら。う。と。心。中。小。咲。て。我。内。舎。へ。帰。ら。れ。り。此。時。乳。人。侍
 女。も。居。り。多。れ。草。の。餅。の。吏。と。知。者。あ。り。多。小。豊。九。八。平。日。小。姐。と。睦。び。親。し
 時。と。も。た。く。姐。の。居。間。へ。往。通。へ。乳。母。も。連。と。ま。り。来。り。多。る。也。姐。小。電。愛。の
 豊。九。な。れ。播。抱。た。て。雛。と。見。せ。つ。慰。め。居。り。所。へ。一。人。の。侍。女。ま。り。来。り。殿。上。已。の



御参内なるのみ。今御帰館在まされと告ぐれば、姫は又大臣の帰館と出迎んとて豊丸を抱き下り、吾身又上の御帰りと出迎ひ小参るなり。阿子此座にて遊び少時待居り、願て来り侍るなり。侍女と連て出迎小往り、豊丸は只一人跡小残り、雛の調度など再び居れ、卓の餅を今午へあれ推ぐるふ欲く思ひ、傍小人あれす、ツツとて食し、又ツツとて己小申入んと、今午急ち毒茶廻り、苦と叫びて、席上小仆ま、手脚を張て、向苦と、照日前ハ彼餅を今や姫の食さんと密小我丙舎と立出、姫の居間へ到る小、豈計人実子豊丸より鮮血を吐、縛八剣と喚れ、苦と多々忍んで、大い仰天、是ハとも何時の程小此所へ来しと心地惑ひ抱れ、如何せん、強きとも内小姫ハ斯ともあざむく。乳人侍女と侍て居間へ入り来り、此体と入るとも歩強た泣悲と、乳母侍人も強た惑ひ、茶よ水もと叫まると、豊丸の乳母も

此強動とま付て足も空おけ来り、強た泣て茶と吞せ水と含ませられ、其詮あ、豊丸ハ苦と向、其面色紫色小感て終小空しくなり、又大臣も斯と、斜あむ、強た姫の居間へ来られ、豊丸の妻此を見て愁傷限り、君の午小握り、卓の草餅と入り、餅小毒茶と入るとも、午飼乃鷹鳥犬小残り、草餅とよ、食し、ちらり小忽ち血を吐、狂ひ倒て死し、諸も餅小毒有、小吏決し、何も何者も草餅と雛小供し、乳人侍女も向、乳され、照日前が姫小下、折小乳人侍女も、姫の傍小居、更に雛を贈り、とち、依て其由と上、獨照日前小身小冷汗を流し、其色も、我子の屍と抱て、泣居、大臣は、姫小向ひ、彼草餅ハ雛を贈り、と問れ、姫ハ、推心小、継母の毒害せん、との巧む、然知るとも、明白小言、継母の罪小、落人更と厭ひ、態と雛小供し、と、も知るとも、各の、大臣甚に辨り、斯て、其本人小、明あ、とて、國守將監

を呼出で君公の毒死を結り。館中小奉公する所の男女婢女奴僕小の徒付嚴
 く毒針を巧く犯人を穿撃せんと命せんが。蘇生する更とやと。普く医
 師と召寄り針灸医茶の術と絶させらるるも。六脈とも絶色衰下五腑冷切
 されども。とも医療のおよ所ふいごと。衆医言上るおど。今絶とてた術もな
 く。終ふ屍と棺ふ収り葬式の営とせしめらる。國岡將監館小仕る男女と入
 づ呼出して。姫君小草餅を献り者や有と嚴く穿撃せしめ。雖も人其
 ごと覚しれ者もわく。皆毛頭存せざる由言々るふより。將監も穿撃小と徳
 果多る時。子息源吾密ふ又ふや多る。先年館の庭中。山下小遠次が面
 を包み。次女と変て横死せし。何者の所為とも知されども。渠惡逆を人として。
 好んで。姫君の御内金の庭前。直宿して。封じ。不審ふい所。今般。姫君と
 毒害せんと謀り。是決と勤仕。乃男女の所為。おては。疑ふら。御臺所の心

街より出。義おてい久。彼附人山下。遠内其子小遠次が封じ。後俄も勤仕を
 辞。夫婦とも遁世出家せり。御臺と練りての入道と。思れゆ。や多る。將監も
 ろち點頭。我も北堂の心底をうら。更久。此上。今。應妻小命。姫君と賺
 一。向。後。おせん。妻と呼出して。如此。言て。姫君小実。更を向。落せよ。と言。合。多
 小。と。妻。さ。心得。て。館。出。勤。傍。人。あ。れ。折。を。見。合。せ。密。小。姫。小。向。以。種。く。釘。を
 尽。賺。し。練。ち。と。餅。を。贈。し。人。を。向。れ。も。姫。尚。維。も。其。人。を。さ。と。筆。を。抗
 ち。あ。ら。も。い。よ。せ。と。る。方。ふ。う。人。を。難。彼。の。あ。と。お。ひ。と
 と。三。首。の。古。歌。と。書。て。よ。何。更。も。や。され。り。乳。人。と。歌。の。意。と。あ。と。其。す
 懐。中。小。納。め。を。帰。り。夫。將。監。小。右。の。歌。と。は。如何。向。ま。い。せ。て。も。姫。君。餅。の。贈。主。と
 告。お。つ。と。此。奇。と。書。て。給。り。ぬ。と。言。々。る。お。將。監。お。唾。と。眉。と。皺。め。此。古。歌。と。音
 門。品。の。還。著。於。本。人。と。あ。る。経。の。文。を。題。と。て。飲。一。奇。か。り。と。及。及。る。お。並。小。姫

君毒餅を贈り人の名を明しむる。此古歌を書て給り、其本人の罪と著き
 と深く其名を包むる。是を以て考れ、以て北堂の胸中を疑ひ、
 你今より斤時も姫君の側を去む。御膳部菓子及び湯水も弑毒させ、万端
 小心を用ひ、少も油断なく守傳れ、と急度命じ、妻女心得、其より日夜勤
 仕して、姫君を守護し、食物、衣初、の菓子、侍女、弑毒させ、北堂、心と置て
 猪、隻、小、氣と、賦り、姫と、大切、守、傳、れ、り。且、兇、母、照、日、前、ハ、毒、菜、の、奸、計、圖、小
 あつ、却、最、愛、の、実、子、を、毒、餅、の、為、小、亡、ハ、愁、心、傷、悲、歎、限、ち、追、慕、の、念
 止、が、れ、小、付、て、姫、を、我、子、の、仇、敵、と、怨、む。何、卒、豊、成、卿、小、鏡、言、追、失、人、と、昼、夜
 心を困り、執着嫉妬の悪念と恐ろし。然、小、朝廷、ハ、孝、謙、天、皇、藤、原、仲
 平、呂、豊、成、を、御、電、愛、浅、く、依、て、仲、平、呂、君、電、小、鏡、リ、我、意、の、行、奈、ま、り、れ
 小、大、伴、古、平、呂、福、奈、良、平、呂、以下、仲、平、呂、と、悪、く、伐、亡、ま、ん、と、謀、り、り、り、り、小、密、謀、露、頭、一

